

日本版「ポストモダン」を再考する

ー仲正昌樹著『集中講義！日本の現代思想ーポストモダンとは何だったのか』
(NHK出版、2006年)**をめぐってー

はじめに

「今ここにある現実」に連結しながらも適度に時間的距離も知覚可能となった「オンリー・イエスタディ」たる日本の1980年代を対象化する著作は一定の市場を確保したかのようである¹⁾。評者の目に付いただけでも2004年の大塚英志の仕事²⁾あたりを嚆矢に放ち、2006年にほとんど同時に出版された原宏之の試論³⁾と80年代パフォーミング・アートの現場にいた宮沢彰夫の講義録⁴⁾によって歴史的検討も本格化してきたとの感慨を強くする。ただし、大塚のそれは比較的狭いアングラ漫画を舞台とした批評としての限定を有し、後者の2著も年代記的な事実確定の段階をまだ数歩も出てはいない。さらに80年代を通じてもっとも劇的に変化を遂げる社会思想についての研究は、わずかに『現代思想』の特集「ポストモダンとは何だったのかー80年代論一」に収録された若干の論考が先鞭をつけていたに過ぎなかった⁵⁾。ポストモダニズムの思想的襲来に際して、すぐさま「60年代」以降の知識史的総括を持って迎え撃った佐々木力⁶⁾、さらには1980年代の思想史的位置を20年代から逆照射した鷺田小弥太の浩瀚な著作⁷⁾を顧みると、「80年代そのもの」への思想的デッサンを「ポスト・ポストモダニズム」時代の批判的思想はいち早く引き受けるべきであった⁸⁾。この点で「80年代論」をめぐって知識史的に興味深いのは、「80年代」に登場する全共闘世代批評家による「60年代論」、とりわけ「1968年」への論及であ

ろうか。ある意味では「60年代」論は「80年代」を語る前哨戦を交えた戦場であったとも評されるかも知れない⁹⁾。

80年代は、バブル経済と90年代初のその崩壊によって画されるわけであるが、社会的・文化的にそれまでの「戦後」と大きな断絶を作り出した時期でもあった。さらに80年代を経過する中で生じた日本の思想的変化は、あるいは45年の敗戦前後よりも巨大であるとも見られ、後年、この時代への注目はすべての社会的・文化的領域において決定的となるに相違ない。経済的には80年代、日本は中曽根内閣によって「小さな政府」の標語の下、新自由主義政策は国営セクターを次々に民営化し、いわゆる「護送船団」方式による政府主導計画経済への決別の叫ばれた年代でもあった。欧米の経済的困窮の裏面としての日本の巨額貿易黒字は、85年のプラザ合意を契機とする「強い円」の容認と日本の国際的発言力上昇にも連動し、日本国内の「コクサイカ」も急激に進むことになった¹⁰⁾。今では信じられない話であるが、この時期までは一部の例外を除き日本の街頭で外国人を見かけることも稀で、日本人の海外留学や渡航もさほど一般的でもなかったのである。こうした状況を背に受けて俄作りの「国際**学部」なるものも日本の大学に出現し、逆に「ジャパン・アズ・ナンバーワン」の秘訣たる「日本の経営」を学びに世界中から留学生がやってくることになったのである。この視覚的に印象深い風景の横では『若

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

** ISBN: 40910720

者たちの神々』¹¹⁾＝「ニューアカ」と称される一群のポストモダニストたちは英雄時代を謳歌していた。わけでも浅田彰、中沢新一、栗本慎一郎、山口昌男、柄谷行人、蓮見重彦などの戦闘的・前衛的な文化批評は20年代の福本和夫さんながら¹²⁾の否定力を発揮し、気がつけば70年代までの知的状況を遙かな歴史的過去に遠ざけてしまったのであった。

この80年代に豹変する日本の思想界を分析した最新意欲作である仲正昌樹の著書を論じるにあたって「評者と80年代の関わり」をまずもって明らかにしておこう。評者は80年代の半ばから日本を離れ騒乱真っ只中の「東欧」に生活の場を変えていたため、日本のバブル絶頂期とその崩壊をまったく知らない。評者の「帰宅」したのは95年で、阪神・淡路大地震と地下鉄サリン事件の喧騒の中での話であった。次に評者は70年代中期に歴史学を専攻した学生であった出自ゆえ、やや反時代的にも講座派マルクス主義の洗礼を受け、マルクス主義者として自己を自覚したおそらく日本近代史上最後の世代に属する。いくら何でも70年代中期に「講座派」は時代遅れも甚だしいと輦轡を買いそうながら、日本史研究の領域ではほとんど断末魔の輝きを放っていたのであった¹³⁾。ただしマルクス主義に一応内在してものを考える人生を通過したことによって、95年に「帰宅」後、仲正のいわゆる「ポストモダンの左旋回」の行き着いた末に現れたカルチュラル・スタディーズ系列、ネオ・ラディカルズの諸形態¹⁴⁾に対して、批評的な応接をせざるを得ない距離感を抱いている。それについても小論では課題に関連する範囲内において触れるだろう。（文中のページ数は仲正の著者からの引用である）

1 戦後革新をめぐるマクロな構図

まず本書の梗概から始めよう。2006年の現時点では「ウケなくなった」80年代の流行思想を「ポストモダン」と定義し、その生成・発展・変貌、とくに「左旋回」過程を本書は骨太に描写している。「Ⅰ 空回りしたマルクス主義」では、ポストモダニズムの殷盛に直接的に先行する思想として、70年代まで制度的な思想的枠組みを決定していたマルクス主義と丸山政治学的近代主義を要領よく仲正は概括する。評者自身も同じような分析を行ったこともあり¹⁵⁾、この指摘はむしろ通説的観点に近いかも知れない。「Ⅱ 生産から消費へー「現代思想」の背景」では、日本の80年代流行思想の引用元となったフランス・ポスト構造主義思想の論点を辿ってゆき、重要な論客の微妙な論理の差異や特質について論じる。20年代のベンヤミンの都市論に現代思想の直接の淵源を求めるだけでなく、ボードリヤール消費社会論に継承される過程、誤解されがちなボードリヤールの記号論的意義そのものを仲正は明快に略説してくれ、田中康夫『なんとなく、クリスタル』の画期的意味に及ぶ。さらに実存主義との論戦を通じて構造主義がフランスにおいて思想的王者となっていく道程、構造主義を超克すべく燦然と登場した諸思想—フーコーのエピステメノロジーからドゥルーズ、ガダリの構造主義の「脱構築」にいたる—を俎上に上げて行くのである。この作業は、実に浅田彰『構造と力』¹⁶⁾が、「脱構築」批評の100%の「バカリ」でありながらも、フランスとまったく構造的に異質な機能をして「日本版ポストモダニズム」の鶴となってしまったイロニーを確証するために著者の用意した周到な伏線である。そうした前提を踏まえて「Ⅲ 80年代に何がおきたのか」では、日本版「現代思想」の誕生からジャー

ナリズムを席捲する「ニューアカ」が瞬く間に制度的知識人の座を奪い取った趨勢を論じ、最後の「IV 「現代思想」の左旋回」では、その「終焉」=「左旋回」¹⁷⁾から批判言説のステロタイプ化(「水戸黄門」化)に至る進展を日本版「ポストモダニズム」の論理的限界をすれすれに内在して論じて行くのである。このように本書は、簡潔な中に「現代思想」をめぐる枢要な論点をすべて網羅し切った傑作であるとともに、今後のあらゆる新研究の踏まえるべき布石となろう。評者くらいの世代の読者にとっては、過ぎ去りし熱き若い日に花向けられたレクイエムとも聴こえ、若干の感涙を交えないと読めない叙述も多い。本書を読む際に欠かせないBGMは文字通りYMOであろうか¹⁸⁾。

マンハイムを持ち出すまでもなく、思想とはあくまでも存在被拘束な「社会的関係場における」言説であり、文化科学における理論なるものも「思想」の函数値である以上、仲正の「理論史」を拒否した、醒めた、ある意味では古典的とも言える「社会思想史」的視座は、評者にとって馴染みの深い立脚点でもあり、批評対象との距離の取り方もきわめて好感の持てるものである。評者は仲正との共通了解事項の多さを再確認する幸運を率直に述べないわけには行かず、以下の若干の私見開陳は部分的補綴、すなわち僅瑕を修復する範囲を一步たりとも出ないとお断りしておく。

総じて、評者は80年代という近過去も60年代のたった「20年後」に過ぎない事実¹⁹⁾に改めて驚愕²⁰⁾して、60年代の思想的展開過程にさらに沈着すれば論点の厳密化が図られるように考える。60年代日本で勤められた高度経済成長を、戦後米軍占領下の改革を順延させた40年代新官僚の輪廻した戦後「政治的保守」によって主導さ

れた開発型オリガーキーであると把握すれば、思想的地図を読み取る羅針盤を得られないだろうか。また60年代までの論壇を支配していた圧倒的な多数派は、仲正の言う「現実離れのマルクス主義」と「大衆社会のサヨク思想」に括られるように見えながら、仔細に見てゆくと必ずしもそうでもないように考えられる。加之²¹⁾こうした「革新」はしばらく後に台頭する「保守」に先行するのが通例である、と仲正は一般論¹⁹⁾に解消するものの(46ページ)、私見によればことはもう少し複雑怪奇である。明治維新直後における「体制的保守」とは開発独裁権力=「革新」の謂であり、これに対して「反体制」には西洋近代思想の表皮を被った本物の「保守反動」=尊皇攘夷・士族民権の諸相から「西洋近代化」を希求する「反体制革新」までが戦列に参集し、思想的には明らかに「体制保守」=「革新」よりも後発的である。体制保守こそ文明開化の革新的推進者であって原理主義的理念²⁰⁾の最大の敵対者に他ならなかった。

戦後日本はこのコロラリーに他ならず、排外主義的軍国主義のうちに含有されていた「革新」の部分が、「戦後・体制的保守」の本流を陣取って吉田学校の系譜を作り、あろうことかアメリカ帝国主義をパトロンにして高度経済成長に至る路線を敷いて行ったのである²¹⁾。こうした「体制的保守」=「革新」の配置こそ「反体制革新」にも先行していたわけで、しかも論壇ジャーナリズムにおける「支配的イデオロギー」としては「反体制」の優位を現象する捻れた構図こそ戦後日本ならではの時代絵巻に他ならないのであった。「保守」を極めて厳密に「近代批判としての保守主義」に概念規定するなら、戦後日本の体制保守勢力はいかなる意味でもそれとは無関係の代物で、戦後思想史総体でも福田恆存と勝田

吉太郎あたりしか該当者は見当たらず、その大衆の戯画・西部邁を加えても圧倒的例外でしかない。このタイプの保守主義の出現ならば確かに仲正の書くように「革新に後発する」に相違ない。彼らの思想的立脚点は近代批判または大衆社会批判にこそ根差すからで、勝田など異端の保守主義者はなぜ自民党的革新主義との同衾に我慢できたのか評者などさっぱり理解できないくらいである²²⁾。

この歴史的準拠枠のうちに、評者は個別の戦後思想の所属象限と相互の関係性をはじめてトポロジカルに位置づける座標軸を設定可能であると考え。まず大衆社会批判を通過した、その限りではポストモダンな管制高地から「日本の現前」を見据えた丸山政治学²³⁾の「イデオロギー的役割」は丸山エビゴネンによって「近代化論」に変形されていたと評者は捉える。これは日本マルクス主義、とりわけ「講座派」理論²⁴⁾と整合性を有して「反体制革新」の中軸を形成していたわけで、一見「体制的保守」を否定しながら結果的には補強する論理を形成していたものと60年代あたりまでの思想的配置を考えたい。丸山政治学に内包されていた「大衆社会のサヨク」フラクションは、丸山学派では異端の系譜を形成する松下圭一らによって自覚的に継承されるけれど²⁵⁾、この論脈は大衆社会批判でなく「シビル・ミニマム」論（＝市民社会の経済的基礎確保要求）に転位してしまい、いつの間にか「体制的保守＝革新」の中に溶解してしまう。このタイプの「革新」はアメリカ民主党的「革新」概念に近接し、戦後日本「体制保守＝革新」とも本来的に整合するため、70～80年代を通じて本物の体制そのものに成り代わったわけである²⁶⁾。革新自治体のいわゆるバラ撒き福祉によって官僚層の瀰漫と慢性的財政難を結果し、80年代シ

カゴ学派経済学のネオリベラリストに道を開いた図は南米チリのミニチュアを彷彿させるようである。中曽根から小泉に継承されるアメリカ保守主義流の新自由主義政策は、従って、近距離的にはこの勢力を「抵抗勢力」に仮想敵に見立てたのである。これに反し「シビル・ミニマム」論に向かわず、逆方向の市民社会批判に転換し、60年代後半にアンチモダンへ突き抜けてしまう動向は、丸山本人にとって「意図せざる」波及効果だったかも知れない。この動きはまさに丸山学派インサイダーでなく、丸山の言う東大法学部研究棟をナチス顔負けの暴虐で破壊し去った「赤頭巾ちゃん」たち、すなわち丸山学派アウトサイダーによって「丸山を超える」と僭称する粗野な方法で表現されたからであった。ところで「近代化」を目指す社会論でまことに微妙な場所に位置するのは、60年初頭の従属帝国主義論争の鬼子とも称すべき構造改革論であるかも知れない。本来的には一種の漸進的社会民主主義に収斂するこの議論は、そうした方向（「江田グループ」）を生み出しつつも、思想的には「市民社会」の肯定的発展（揚棄の「揚」の部分）という一見穏健な構想のうちに、近代化論から「市民社会」的概念をバイパス（構造＝機能分析的には狭義の「社会」のディメンジョンにおける「近代化」に連動させず²⁷⁾）しがちな「反体制革新」をトータルに超克する視野を生み出す。ここから恰も人間疎外論を成立させる近代的人間論を社会領域で積分したような「市民社会論」的マルクス主義の論脈を誕生させ、ルカーチ中興からブルードン再読へ流れるブームを時潮に乗せてゆく。「市民社会論」的反对派の真の元祖はハンガリー事件後の日本共産党から飛び出した大池文雄²⁸⁾であるが、アカデミズムにおいては高島善哉→水田洋→平田清明²⁹⁾…望月清司の系譜で制

度化され、丸山政治学をも再発見しながら、70年代後半に至る時期までマルクス主義内部では最も知的に豊かな学派をなしていた。「市民社会」はヘーゲルの指摘のように放恣な無政府状態を醸し出し、「国家」（さしあたりはプロレタリアート独裁国家権力を創出すべき前衛党）によって「揚棄」するはずであった。ところが、日本共産党を含む既成マルクス主義では専ら（理論的ばかりか行動実践的にも）「棄て」られていた状況を見据え、「市民社会」の肯定的発展・継承を戦略課題にしたわけである。思えば、戦後日本マルクス主義正統派＝「講座派」の革命戦略構想こそ「ブルジョア民主主義革命」であったわけだから、この学派の台頭は二重の皮肉だったかも知れない。70年代を彩るグラムシ・ルネッサンスもこの延長線上にあり、西欧マルクス主義、フランクフルト学派のブームもこれに続いた。ただし次第に「市民社会論」はそのアトムとしての「近代的個人」概念が廣松渉の「近代的主体」概念＝疎外論批判＝物象化論で駁撃され、ある種の科学主義的解体を呈するにいたる。この部分に注目すれば、廣松はポストモダニストとの距離を意識的に確保したものの、「近代的個人」のポストモダンな否定とパラレルな水平面を用意したとは言えないだろうか³⁰⁾。80年代におけるマルクス主義の消滅は、評者によれば、マルクス主義者・廣松渉によって「市民社会論」学派の命脈を絶った死刑執行によって真の完了を迎えるのであって、いわゆる正統派マルクス主義の知的権威は70年代には霧消済みだったように察せられる。そうして70年代中期のユーロコミュニズムの幻影を亡失するころ、「市民社会論」学派に秋の夕も訪れ、自称ポストモダニストがグラムシを聖典に祭り上げる吃驚仰天の後日譚を想起しないまま暫しの眠りに就くので

あった。

話を戻せば、評者は丸山本人ならぬ丸山学派³¹⁾を含め大塚史学や川島民法学、大河内経済政策学など一般的に「近代主義」と呼ばれてきた知的営為は本来的には近代化論の範疇に属し、「大衆社会のサヨク」とは論理的に異質の思惟形態であると把握したい。そして「近代化論」は実践的に「日本を近代化する」ために、「現前の日本社会や文化」を「理念的近代から批判」する根拠地＝「理念型としての近代西洋」を訓詁注釈する制度的大学人はもとより、「印度以下のでない賃金」を確保するための労働組合、そして冷戦の軍事負担をアメリカに委ねて経済建設に邁進する労農派マルクス主義経済学で国家公務員上級試験に合格した官僚までの連合艦隊を編成できたのであった。「反体制革新」・「体制保守」が「近代化論」という「一体」＝「神」の2つのペルソナであったわけで、「反体制保守」なる精霊はどうやら戦後日本には滅多に降臨しなかったようだ³²⁾。

2 60年代の反近代—ひとりの『幻の勝利者へ』—

こう見ると思想的イヴェントのいくつかはきわめて明瞭になるように評者には思われる。まず60年代に登場するロストウ学派「近代化」論³³⁾への「反体制革新」からの怒涛の反発の意味についてである。まったく逆説的ながら、ロストウ・モデルは「現前の日本社会」を「エスタブリッシュされた近代」と肯定的に捉えた上で「非共産主義的近代化の模範」（ロストウは鋭くも既成の共産主義を近代化のための開発独裁と把握していた）であり、「明治維新以来の近代日本の歴史過程を近代化」と位置づけたのであった。ロストウ・モデルの日本像は「現前において近代」なのであるから、「近代化論」の名称とは裏腹に「近代主義的

日本社会評価」をうち含み、「ブルジョア民主主義革命」を否定する故に反体制革新「近代化論」者たちの十字砲火を受けたわけである³⁴⁾。この錯綜した風景は、より日本の立場を有利にして改定された日米安全保障条約に、日本国民が激怒し60年安保闘争を闘った屈折した姿と100%パラレルと言える。ところで、「狭義の近代化論」的感性、つまり「日本はすでにして封建残滓の色濃い発展途上社会でない」とする皮膚感覚は、60年代後半には完全に広範な国民によって抱かれていたのではないだろうか。60年代後半の学生運動など「大衆社会のサヨク」は、制度化された「近代化権力」たる「反体制革新」にも叛乱を起こしたのであるが、この闘争のなかで「アンチモダン」の諸理論が大きな跳躍・練磨を見た点を思想史的にもっと重視すべきであるように評者は考える。近年の「60年代論」は前記の如く「80年代論序説」の役回りを担っているせいか、ほぼ完璧に60年代後半こそ反近代の季節であった事実を忘却しがちである。「現前する日本」への闘争宣言に「アンチモダン」の文字を書き込むためには、「現前する日本」は「エスタブリッシュされた近代」であるとの了解を要求する。思えば竹内好による「近代の超克」再認は1959年のイベントである³⁵⁾も、60年代を通じて低声で語り継がれる「超克」の作法は80年代版のそれと異なっており「反西洋近代＝アジア回帰」を輪廻していた³⁶⁾。西洋によって可能性を摘み取られてしまった東洋の再興という地政学を歴史認識に垂直化すれば、近代化の否定、さらに近代によって辺境化・周縁化されてしまった価値の再認に到着するだろう。60年代中期から激甚さを増す公害問題、都市問題も圧倒的な現実呪詛の温床となり、石牟礼道子、谷川健一（因みに谷川雁の実弟たる彼は水俣出身）、新川明、判沢弘、

松永伍一、井出孫六らの執筆活動も本格的に開始される。柳田国男や折口信夫の民俗学研究もエスノメソドロジカルな再評価を試みられ、「反近代の革命」の道程を探求する不可欠な議論とされた。まさに「土着の思想」（多くは「革命的な」）を発掘する作業は、期せずして最も前衛的な思想史の課題となった³⁷⁾。北一輝、権藤成卿、橘孝三郎など農本主義者をも熱い視線を持って顧みられ、松本健一のような反近代思想史家も現れて、『伝統と現代』というタイトルの専門雑誌まで創刊された。『思想の科学』グループの仕事もこの時期には、アンチモダンに目一杯の面舵を取っていたと評して差し支えない³⁸⁾。かくて反体制革新のコンテンツは「アンチモダン」な「土着（反近代国家）への“回帰”もしくは創造」へ大きく分岐・旋回し、それまでの「近代化論」の範型に根本的な異を唱える³⁹⁾。この潮流の果たした役割は瞠目すべきもので、今日の「カルスタ左翼」の論点のすべてはここに出尽くし、国民国家論批判などベネディクト・アンダーソンの輸入に先んじて自前で処理済であった。仲正は「日本の「現代思想」は、西欧近代の所産である「理性的な人間」観を否定するところから始まった」（152ページ）と書いてはいるが、この仕事は60年代末に「反近代」思想群が武骨な方法でやり果せていた。フランスなどにおいても「現代思想」＝ポスト構造主義の出帆にあたっての「反近代」を指摘されるけれども、彼の地の場合、反近代＝反管理社会（チェコ事件を媒介とする既成社会主義を含む産業社会）への傾斜であって、中国の文革の影響を受けたと雖も「土俗思想への復帰」という視覚は決して主導的立場になかった。それはポストモダンへの入り口としてのアンチモダンだったと評してよく、50年代末からの文化的ヌーヴェルヴァーグを継承する

中で前者にやがて変身する蛹となる。日本の場合、60年代アンチモダンの史的意義はロシア近代思想史におけるスラブ派のそれに近似し、フラットな近代化論をもって把握しかねる現実、近代化の荒波で惹起した問題群への非普遍的情動への肯定を基本としていた。

後のポストモダンとの関わりで重要なので敢えて一言しておく、この関係場では、吉本隆明の思想的位置はまことにユニークで、戦後革新の体制的暴力＝思想的開発独裁を「近代」の理念から駁撃する（中江兆民が近代の理念で近代化権力たる明治政権を批判した経緯を想起させる）ために「(日本の)近代的個人」＝「アンチ・モダンな“大衆”(＝ここで言う大衆は「非知識人」と言う程度の意味)」をフィクショナルに仮託した戦略に思えてならない。「個人」を理念にするなら「西洋近代」とは似ても似つかぬ多数派たる「土俗大衆」をも各自「基数1」に計算しなければ論理矛盾であり、「指導者—大衆」モデル＝「近代化論」は前衛党論も含めて「非近代的」ではないか？と吉本は問いかけたわけである⁴⁰⁾。80年代に吉本はコム・デ・ギャルソンの下着を着て美空ひばりを称揚する奇観で「思想の危険について」察知させるピエロの役を引きけるが、今から考えれば、彼は同じような不格好な衣装を60年代でも身に纏っていたようにも思われる。吉本のスタンスは「アンチモダン」に現象する危うさを持ちつつも、モダンとプレモダンの構造的共時性の発見であり、この点は80年代以降に体制派思想家のように写像する吉本の思想を見るための重要な参照軸を提供するように思う。何よりも80年代において「ニューアカ」と蜜月を醸し出す内在的理由は、彼のカッコ付き「構造主義」的切り込みにあったと見て差し支えない。この部分は磯田光一によって先駆的に指摘

されてきた吉本論⁴¹⁾に触れ合うも、仲正の「吉本の立ち位置」についての論述(65～71ページ)はこうした認識と根本的に異なるので敢えて論じておきたい。評者によれば大衆の嫌いな吉本は「“大衆に寄り添う”知識人の役割を演じ」(67ページ)たことなど一回もなく、「大衆」と「知識人」を等価で結び、「一大衆」に過ぎない「知識人」を罵倒する傍ら、返す刀で神棚から「基数1」まで下ろされた「大衆」をも切り捨て、近代(民主)主義の理念を再認しただけである⁴²⁾。

穿った見方をすれば、日本版「アンチモダン」に思想的限界を感じ取ったラディカルズが根本的に近代化論権力知を超克する苦悶のなかで次第に注目していった道具建てこそフランスのポスト構造主義であったとも言えそうである⁴³⁾。ただフランスの構造主義においてマルクス主義の果たした肯定的関与はアルチュセールを持ち出すまでもなく自明であるも、日本の場合、構造主義的知見は反近代に大きく迂回した反体制革新勢力によって発見された⁴⁴⁾ため、マルクス主義の創造的再読には俄に進捗しなかった。なぜならば、日本のマルクス主義は先述のように「市民社会論」的方向転換の過程にあって、「近代西洋」をこそモデルとして再建する作業に余念なかったためである。思えば60年代に、先駆的なアヴァンギャルドも文化諸領域で登場し、とりわけ60年代末期の草月会館は80年代の池袋西武を彷彿させる場所となっていたけれども、このノイエ・ザッハリヒカイトな知と芸は、大筋で反近代的感情によって掬われ、文字通り80年代に再発見させるまで真意は理解されなかった。72年に『サマー・ソルジャー』を撮ってから84年に至る勅使河原宏の映像的沈黙はその象徴的事態であり、貨幣的即物性と現実主義を近代の肯定的承認⁴⁵⁾として納得できなかった本物の

モダニストは孤立無援の境地に追いやられてしまったのだ⁴⁶⁾。この孤独な選択は岡本太郎が70年代版未来学の顔役となって大阪万博の面妖な「太陽の塔」を作った姿を横目に見て決意されたと見れば邪推となろうか。60年代末に「孤絶した精神」としてごく一部にはありえた「ポストモダニズム」は、素面の近代とアンチモダンの双方の喧しさを前にしてまずは戦略的沈思を選択したと評すべきなのだろう。

この60年代反近代という「現前する近代の発見」と「その拒否」による思想的混乱の象徴は60年代の終了した1970年に三島由紀夫の割腹でもって劇的な結末を迎えた。どう読んでもモダニスト以外の何者でもない三島において、散文的な近代を否定する作業は「神話を生きる」反近代的なラディカリズムに他ならなかった。

いずれにしてもフランスでは大きな思想的うねりとはならなかったアンチモダンの台風によって60年代末期の日本は襲われていたという近年あまり語られぬ事情こそ、その後の思想的展開を彩ったと評者は考える⁴⁷⁾。「近代から脱近代へ」と「反近代から脱近代へ」看板を書き換える仕事とでは基本的に異なる工程を要するからである。そして反近代を脱近代に日本人が訂正する際、「日本の近代」は「エスタブリッシュされた近代」でなく「近代化」に他ならなかったわけであるから、「近代」を「近代化VS反近代」の拮抗式に誤解し、「脱近代」の演題で「近代そのもの」を語り始めるかも知れない。

仲正の議論を批判して整理に代えよう。「全共闘の中に「ポスト近代」への萌芽があったとは言えなくもない」(61ページ)のでなくそこに「まずあった」のは反近代の衝動であった。そして吉本などは「理性中心主義の解体を目指す「ポストモダン思想」への橋渡しの役割をも担」ったの

でない。彼は「反近代」を近代主義的に批判＝超克する投企において構造主義的知に他ならぬ日本版「ポストモダン」を用意したのである。反近代から転進した全共闘世代が近代ならぬ近代化を逆転させた「ポストモダン」を標榜して究極の近代主義を述べ始めたとき、吉本は格好の対談相手になった所以である⁴⁸⁾。

3 歴史主義と歴史学

日本版「ポストモダニズム」に色濃い特徴たる反歴史主義ならぬ反「歴史学」主義の意味について寸言しよう。これについては「歴史一般」でなく「日本の歴史学」への言及を避けて通ることは不可能である。仲正も80年代の流行思想の担い手の中心として山口昌男や栗本慎一郎、中沢新一などの人類学者の貢献の大きさに留意しているが、彼らは後述する社会史と相俟って歴史領域の革新に与った特徴を残している。本家のフランスにあっては、オリジナルの構造主義（反歴史主義はこの時点で最大の特徴であった）は人類学領域から隆起した思想運動であったけれども、ポスト構造主義の段階では哲学や心理学、精神病理学などの主導権こそ際立っていた。ポスト構造主義は、西洋近代に沈着して近代性の構造的実体化こそ克服課題に設定したために他ならない。面白いのは、山口昌男は都立大大学院で文化人類学を学ぶ以前は東大文学部国史学科を卒業し、中沢新一は最近の『僕の叔父さん 網野善彦』⁴⁹⁾に記すように、日本の歴史学に近接する場所に身を置いていた経歴である。これら人類学者による仕事は、日本では何よりも、件の網野善彦、阿部謹也など社会史と総称されることになる「新しい歴史学」の台頭とタイアップした経過そのものに特異性があった。小論の冒頭に記載したように、70年代後期に歴史学を

学んだ評者にはこの「社会史ブーム」は目前に生じた出来事であったから、多少は内在的に理解可能な部分を有する⁵⁰⁾。戦後歴史学の指導的ディシプリンとなった「講座派」マルクス主義理論は、構造的要件として「反封建的ウクライアの残存」を幾ら何でも指摘しがたくなった60年代前半、日本共産党の「従属帝国主義」論と歩調を合わせて「アメリカ帝国主義への従属」に「日本近代化」の妨害物を求める宙乗りを満場の観客を前に演じた。先述のロストウ学派日本上陸に際し、歴史学者たちが硫黄島先遣隊を買って出たのは、「現前する日本」の「近代化を阻止」したアメリカ人に「お前はもう一人前だ」と生意気な説教をされたことへの12歳少年の反抗という面もあるにはあった。そもそも「近代化」の求心力はナショナリズムであるから、十二分にナショナリストイックであった戦後歴史学は自覚的な反米ナショナリストに転進するには論理的跳躍を必要としなかった。

こうした尻馬に乗って、戦後歴史学は「講座派」マルクス主義以外のほとんどすべての理論に門を閉ざし、70年代に入って相も変わらず「民族の危機」を提唱しながら社会構成史研究の領域に収まる綱渡りを行っていたのであった。先述の60年代後期からのアンチモダンな風潮は制度外の歴史学において「辺境史(沖縄・アイヌなどの史的再検討)」「地方史」「女性史」「民衆史(さまざまな社会的統合から排除された民衆の再検討)」の怒涛を招来するも、制度的歴史学は総体として自らのうちに子飼い化する仕事には成功しなかったように考えられる⁵¹⁾。比較的制度内に近い立場にいた色川大吉にしてから、70年代の声を聞く頃から意識的にマルクス主義史学と距離を置くようになり⁵²⁾、歴史学陣営も徐々に「危険」を察知し始める⁵³⁾。折から台頭し

た中国の文革に「アンガージュ」してしまった異論派マルクス主義史家、例えば井上清とか羽仁五郎などへの警戒も高まり、部落史研究などは悲劇的な分裂を呈し、歴史学はセクト的に「純化」してしまったからである⁵⁴⁾。50年代の民族文化論以来、制度的歴史学と同衾していた文化史研究者も、60年代末からの歴史学の正統派ファンダメンタリズムを見限って、統一戦線の戦列から離れていった⁵⁵⁾。要するに歴史学の領域では、「近代化論」=ナショナリズムの神話は70年代の中期、網野善彦の再登場までたいした挑戦者を持つこともなしに命脈を保っていた⁵⁶⁾。時は恰も田中内閣のロッキード事件に端を発するスキャンダルの中、70年代初期の社共の議席急増もあって、「70年代の遅くない時期」に人民戦線政府を樹立可能に見せる幻影も出現し—ロッキード事件をスタヴィスキー事件のアナロジーで語ったものだった—、旧理論の正当ぶりも「実証」されたかのようであった。かくて70年代中期の季節外れの旋風一過、「社会史」はその穏やかな外貌とは似ても似つかない劇的解毒剤の役割を果たす皮肉な事態となったのであった。時恰も歴史的生成体としての文化事象から歴史を抜き去る構造主義人類学の手法が「社会史」の友軍として立ち現れ、制度的歴史学の「歴史」概念の中枢を占めた発展段階論批判を援護射撃してくれることになったのだ。オリジナルな「アナール学派」は歴史主義批判を内包しつつも広義の再建的レアリズムとして実証的=肯定的(ポジティヴィズム)に働いたのに対して、日本の「社会史」はまずもって否定の精神でもって傑出し、社会構成史研究の論拠を全否定する知的ニヒリズムとなって荒れ狂った。矢庭に人類学者は歴史学へのルサンチマンも露にし、「歴史」をめぐるのは、さまざまな反歴史主

義エピゴーネンの次々に現れる赤風車座と化してしまった。

ところで、こうした三文役者中に公分母を求めれば、裸の構造主義以外の何者でもない思考の姿に畢竟行き着く。構造主義的な存在論は言うまでもなく一種の関係主義であり、同時に関係性＝間主体的に形成される構造の汎文化的・通時代的存在を論証し、歴史主義的な特権、とりわけ「近代」のそれを剥奪可能な地点に人を導くものと言ってよい。それは「ホワイト・オンリー」だった近代民主主義を「エスニシティ・ジェンダー・フリー」にしたという意味においては近代主義そのものの完成品とも言えたかも知れない。だが同時に歴史過程から歴史の脱色は、文学における物語の批判と等しくそもそも過渡的な意味しか担いはしなないと言えまいか。例えば革命を祝祭に脱歴史化して見えてくる世界というのは所詮戦争史を武器史で語る作業を考古学と述べ立てるような偏頗に過ぎはしないか。私見によれば、考古学はいま少し神の手に近いロマンを紡ぎだす何者かでもある。こうした認識を通過した場合、果然、評者の「ポストモダン保守」と定義する福田和也のような大文字の歴史の仮想復権を推進する立場⁵⁷⁾に道を開く結果となるのは蓋し然りと言えよう。

ともあれ破壊の衝動を篋めたニヒリスティックな日本版「社会史」は構造主義人類学者と束となって「歴史を解体する」ことに成功した。旧東欧の崩壊後、コメコン企業の旧技術に世界が呆れ返ったのと同じく、瓦解してゆく戦後歴史学を救済するには時代遅れの枠組みを保守しすぎていた。そのためもあって没落は急激であり、驚く勿れ、「社会史」学派の制度的再編も一瞬であって大学知識人の知的モードになるのに10年とかからなかったのだ。

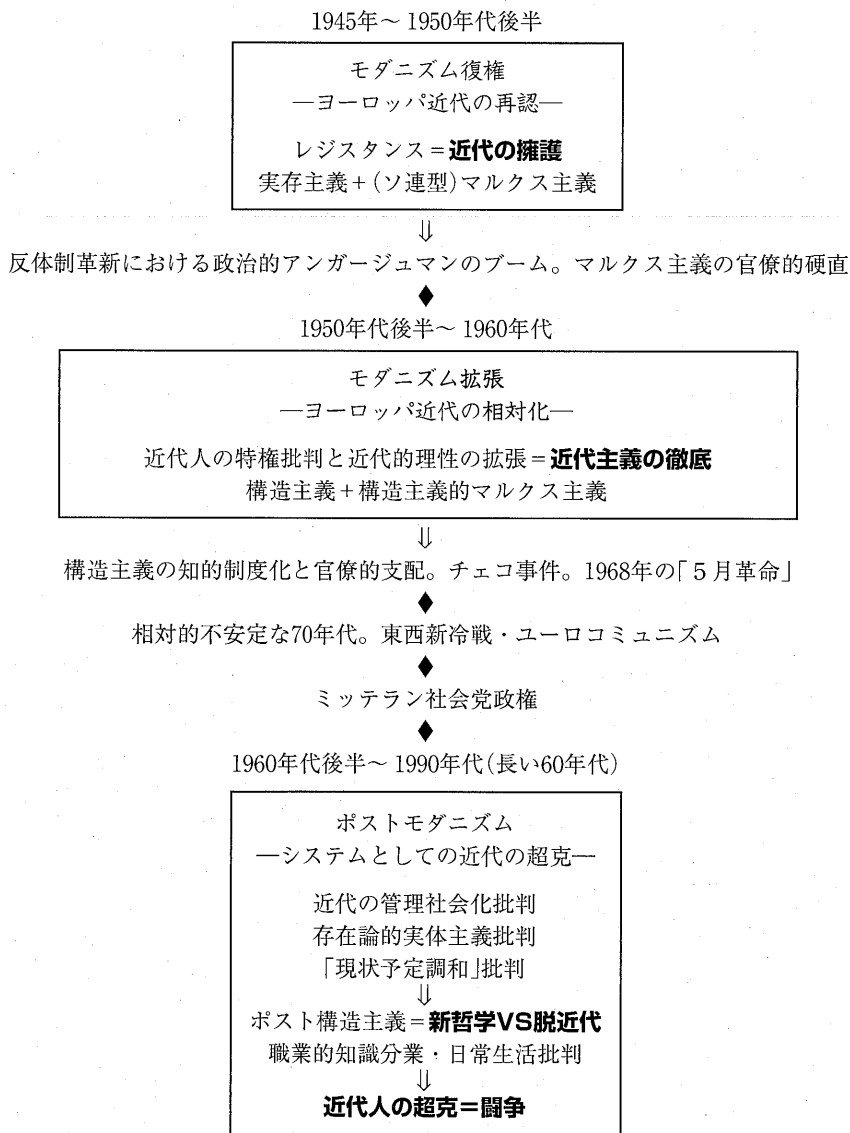
後知恵ながら、70年代の制度的歴史学になくとも従属論程度地了解事項を有していたなら、構造主義を武器にしたニヒリストの猛攻をかなり防御できた可能性はあるにはあった。中心に位置して構造化要因を形成する社会構成と中心によって構造化された社会関係は「構造的同型」＝等価であるわけなどなく、この視点から歴史主義への後退を避けつつ反撃は出来たからに他ならない。実際に一評者の知る例では一、この視点を70年代には導入した旧東欧の歴史学は、マルクス主義の崩壊に伴って反歴史主義的歴史理論に完全に敗北しきったわけではなかったからである⁵⁸⁾。だが、いかんせん、とりわけ日本史は素直なマルクス主義発展段階論の公式に合致しやすいためもあって一この楽天主義は「ポストコロニアル批評」による「一国歴史学」批判の余すところなく剔抉する如くである一か、知的鎖国に甘んじて結局は自ら首を縛ってしまう結果となってしまったが。

ところでここまで書いてきて、評者は60年代日本において厳密な意味における戦後構造主義革命は存在しなかった点を改めて喚起したい気がする。構造主義は、伸正も特記するように、フランスにあっては「実存主義的とマルクス主義の結合」＝「人民戦線的な知」との激烈な論争を通じ、60年代には制度的知識形態になり変わっていた。構造主義的な分析のために捨象された部分こそ社会関係の内実をなし、構造主義的肯定は「不均衡」な発展を看過させる詭弁に結果すると戦後も植民地を有していたフランスではすぐに気付かれた点も日本との相違であった。本家の「ポストモダン」＝ポスト構造主義は、構造主義の存在論的「構造＝実体主義化」（マルクス主義の構造概念がそうであるような）、構造主義の現状保守主義、構造主義インテリの制

度的暴力の両面に対する精神的・物質的挑戦であったわけである。ところが、60年代後期に日本語で書かれた構造主義解説書⁵⁹⁾を読めば分かるように、要するに「近代批判」としては誰も構造主義など理解できていなかった（仲正の言葉では「日本の新左翼思想では、構造主義的な問題意識を受けとめられるほど“進んで”いなかった」127ページ）し、況や構造主義者が大学制度

人の多数を占めていたわけでもない。その代わり日本の大学を牛耳っていたのは近代化論者であって、ポスト構造主義どころの騒ぎではなかったのであった。これとは対照的に、80年代日本で大流行するポストモダンとは、そうした死に瀕した近代化論に引導を渡し、「近代の超克」

I フランスにおけるポストモダニズムへの展開



II 日本におけるポストモダニズムへの展開

1940～1960年代

反体制革新「近代主義」知識諸形態
—ヨーロッパ的な近代の追求—
近代の追求+近代ブルジョア民主主義革命=近代化
近代主義的知識諸形態+講座派・労農派マルクス主義



体制保守と一体となった戦後「反体制革新」の制度化



高度経済成長と経済的近代化



1960年代後半～1970年代前半

反近代主義
—日本近代の相対化=近代としての日本認識—
西洋的近代の否定=土俗的・周縁的近代の再認
「近代主義」的大学知識人批判



大学叛乱。反体制革新の分裂と体制保守の大転換



70年代経済危機の回避と社会的秩序回復・日米の同盟強化



80年代後半のバブル経済



1970年代後半～1990年代(長い80年代)

日本版「ポストモダニズム」
—近代からする近代化への決別—
近代ヨーロッパ的価値観批判=構造主義=脱西洋近代
日本近代=脱または超近代論の台頭と反体制の終焉
マクロな社会理論のニヒリスティックな拒否=「逃走」
職業的知識分業の新規確立とスター(ニューアカ)化
日常的消費への拝跪・物神崇拜・オタク

の名の下に実際に語りえたのは構造主義の祖述による「近代の完成」に他ならなかった。

この「ポストモダン」を自称したモダニズムはニヒリスティックな「否定の精神」であったが故に、「近代化後」の近代を担う過程ですぐさま分裂し、多様化したのも首肯できるように思われる。そして幾ら「左旋回」しても「近代化論」に立ち戻る気配はまったくなく、丸山真男の問題領

域までは再発見可能し得ても、その他の近代化論の枠内に留まる戦後啓蒙主義の大部分は復活の余地は寸分だに見られそうもないのである。

4 政治的現実主義と日本版「ポストモダン」

最後に80年代版「ネオ保守主義」とポストモダンの関連について、評者は仲正とはかなり異なった印象を有する点を述べておこう。仲正は

「現代思想」を時々参照する保守系の知識人を、「ポストモダン保守」と呼ぶ人もいるが、私見では、本当の意味でポストモダンの影響を受けたと言えそうな「保守論客」はほとんどいない（211ページ）と述べていて、保守派論者で自覚的にポストモダンの語彙を振り回す人物を散見しない限りでは正当な評価であると首肯する。しかしながら、80年代に遡って思想状況を再点検すると、実感派エコノミストから政治的現実主義者にいたる体制保守陣営の思想的布陣はポストモダニストと「現前する日本への評価」において完全に野合し、共鳴関係を響かせてパンデミックな流行を見た事情は否めないと判断する⁶⁰⁾。まさに鞭声肅々、夜河を涉ったわけである。このため「近代化論」を基本的ディシプリンとする先述来の「反体制革新」=「体制的保守」ブロックは、80年代にはまことに歪な大変貌を見るに至るわけである。まず単純にして最重要な論点は、反体制革新の存在意義は雲散霧消してしまった事態に他ならない。一方体制保守は、体制の順延・維持を図る戦略を練る必要に迫られ、「近代化」に根本的に取り変わる政治的・社会的グランド・デザインを描く作業に急ぎ立てられたわけである。70年代末から3回にわたって組閣した大平正芳は、「近代化モデル」の終了と「文化の時代」（つまり「近代化」という「模範」を線形に追っていた時代の終焉と「日本的近代」の創出）を標榜し、飯田経夫、梅棹忠夫、大来佐武郎、佐藤誠三郎、高坂正堯、公文俊平、香山健一、山本七平、山崎正和、などをブレン・トラストとして組織したのもこうした事情に照らせば納得できる⁶¹⁾。大平は宏池会会長として自民党内部の保守本流、すなわち吉田学校に連なる系譜を体現した人物であるばかりか、個人的にも経済安定本部から経歴を出発させた

「近代化論」総本山の出家僧であった経緯からしても、この画期的意義は幾ら過大評価しても不当でない。大平による保守本流的「近代化論」の大きな軌道修正があったからこそ、異端のゴースト・中曽根康弘の立場所も一気に大勢順応的な中心部分に移行し、80年代に3回の組閣をする契機を勝ち得る所以である。この観点からすると中曽根内閣は大平の正統な後継者であったわけで、大平こそ中曽根に先んじて「戦後政治の総決算」を遂行した真の先駆者であると評さざるを得ない⁶²⁾。「3ピン1スケ」と称された保守系実感派論客も一気に勢いをつけ、日本モデルに肯定的な言論に追い風を送り「近代化論」を嘲笑し去っていた⁶³⁾。現実問題としても、ポストモダンな空気は、フランスのポスト構造主義の概念をファッションとして眺めながら、糸井重里などのキャッチコピーと西武資本の商法によって広範な社会思潮に転じたと言ってもよく、バブリーな消費を保障する「近代化の達成」は「ポストモダン文化」=「日本文化論」とセットになってのみ流布したのであった。仲正も承認するように、ポストモダンな態度は何よりも「生産から消費へ」の転位であったわけで、認識論的判断転換の僅か前には存在論的転換が担保されていた⁶⁴⁾。この時期に「中心不在」を鍵概念にした日本論としてロラン・バルトの『表象の帝国』は頻繁に参照されたものであった。思想のパーツたる言説、さらにそのテクスチュアルな淵源はまったく異なれども、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」的な自画自賛こそ「ニューアカ」の「ゲイ・サイエンス」の成立与件であった事情は否めることはできない。日本版ポストモダニズムは90年代中期から「左傾化」を呈する前、すなわちバブルの時期にあっては総体的「右傾化」（または体制化）をしていた事実を忘れてはい

けないように考える。ポストモダンは支配的でもっとも安全なイデオロギーだったわけで、これくらい横並び一列になって平気で赤信号を無視できた隊列はなかった。評者の個人的回顧で恐縮ながら、80年代の「現代思想」に圧倒的な解放感を感じその問題領域を納得したもの、「現前の近代日本」は「近代そのものだから脱近代を目指す」プロジェクトだとする点までは納得できても「現前する日本は脱近代的」または「修正近代的な」代物だと奏でる与太を聞くにいたって一発で白け捲くった⁶⁵⁾。「現前する日本」=「脱近代」だとは、大平や中曽根のような「体制保守」=「近代の超克」化を意図する勢力よりも一層「保守的」、否、反動的な思想的構えと言う他はない。評者には「右傾化」または「体制保守」の指向性を自覚していたからこそ、ポストモダン・キッズはバブル崩壊後、新たな存在理由を「左」に舵取りする延命策を取るとともに、福田和也のごとき徹底的なポストモダニスト版保守⁶⁶⁾も産み落としたように考えられる。仲正に反して、評者によるとポストモダンは「左右両旋回」をこそ実演したとしか思われぬ。佐伯啓思にしてもナショナリズム論の再認の前提にはポランニーの市場論（例外的社会関係としての市場認識）から市場はフラットなグローバリゼーションを生まないとするウォーラシュティンの認識までを踏まえているわけで、テクスチャルな明示性には現れない「ポストモダンの保守」を否定できないと評者は分析する。

最後に95年に「帰宅」した評者の驚愕した事実をひとつ。先述のように、アンチモダニズムの諸潮流は、70年代以降制度化された知の世界に食い込むことは拒否（科学でないと）されながら、「従属的イデオロギー」さながらに「近代化論」的思想範型とラディカリズムとしての「イデ

オロギー」部分では緊張感を伴って共存してはいた。評者が歴史学を一向に学ばなくなる80年代前半は、まさにアンチモダニズムの諸潮流は「社会史」と人類学を器にして「ポストモダン」（！）に窯変を見ていたようだが、80年代後半にはそれは支配的ディシプリンの地位に取り替わって大音声を奏でていた。おまけに「講座派」歴史学の牙城だった制度的な諸学会は、壊滅する代わりに旧来と同じ顔ぶれで「社会史」や「歴史版カルスタ」⁶⁷⁾の拠点に化け果せているのではないか！「反動イデオロギー」批判に喧しかった若手マルクス主義歴史家も、今や脱構築批評からカルスタに至るブランドに身を纏ったスマートな中堅論客に転身している姿は、A級戦犯の戦前戦後の帰趨を想起して余りある。それは中沢新一問題で「新旧左翼」の緊密な統一戦線をもってポストモダニズム滲入を阻止した東大駒場キャンパスがポスト「ポストモダニスト」の牙城に変化して今や表象文化論の学位量産機構に転じた奇観と併せ、まことに日本的な予定調和ではあった。

注釈

- 1) すべての出発は『別冊宝島』110の『80年代の正体！それはどんな時代だったのか ハッキリ言って「スカ」だった！』、JICC出版局、1990年、である。この特集のライトモチーフは「80年代ニューアカ」のオブティミズムへの斜視にあり、標題のように「スカ」として全否定するスタンスにはないが、注4の宮沢の著作などにも盛んに言及されるように、「全否定」的なイメージの独歩する著名なアンソロジーとなった。ただしこの特集の出版された1990年は、まだ「80年代」的喧騒の渦中にあり、自らの同時代への否定的自己言及版カタログと読めばいい。編集部のアナウンスは厳密には、「自分との関係性や経験を語る言葉さえも失いつつある今だからこそ、問いたいのだ。」「80年代、そ

- れは『スカ』だった」のではないかと。』と言う問題提起であって「スカ」とする論断ではない。
- 2) 大塚英志『おたくの精神史—1980年代論—』、講談社現代新書、2004年。
 - 3) 原宏之『バブル文化論—(ポスト戦後)としての1980年代—』、慶応大学出版会、2006年。
 - 4) 宮沢彰夫『東京大学「80年代地下文化論」講義』、白夜書房、2006年。
 - 5) 『現代思想』2001年11月号(29巻19号)、青土社。
 - 6) 佐々木力「批判的思考の衰退—学問論の20年(思想空間の変容1968-88)」、『思想』1988年11月号などをはじめ、「批判的思考の再生を求めて—一日仏左翼人の30年(上)(下)」、『世界』1999年1月号~2月号、に至る同時代知識史の批判的考察。
 - 7) 鷺田小弥太『昭和思想史60年』、三一書房、1986年。なお同書に対する評者による書評もある。小島亮「『現代日本』思想史の試み」、『週刊読書人』、1986年9月29日号。
 - 8) 佐和隆光、新藤宗幸、杉山光信『80年代論—世紀末の政治・経済・思想』、新曜社、1987年、や杉山光信『学問とジャーナリズムの間—80年代イデオロギー批判—』、みすず書房、1989年、に収録された同時代批評をここでは除外する。杉山の議論に典型的に読めるように、同時代批評の担い手は「ニューアカ」などの知識的位置づけを近代知識史の中に設定しようとそれなりの努力をしているものの、「批判」というよりは「認知」の段階と評していいと思われる。この点で面白いのは大江健三郎や磯崎新など必ずしも「ポストモダニスト」に括れない知識人の同時代批評に、『現代思想』1989年4月号に邦訳されたマサオ・ミヨシ、ハリー・ハルトゥーニアンらの論文を加えて編集された Masao Miyoshi and H. D. Harootyan(ed.), *Postmodernism and Japan*, Duke Univ. Press, 1989, である。のちに広義の「カルスタ左派」歴史学者として日本のジャーナリズムにも積極的に介入するアメリカの日本研究が、日本版ポストモダニズム批判の前衛であった事実は記憶しておいていい。
 - 9) その代表は桂秀実の2著、『革命的な、あまりに革命的な「1968年の革命」史論』、作品社、2003年と『1968』、ちくま新書、2006年、に他ならない。「60年代」こそ「80年代」の出発点に他ならなかったことは桂の『JUNKの逆襲』、作品社、2004年、を読めば明らかになる。まさに「80年代」は「60年代」から始まる時代の「終わり」でなく「本格的な始まり」であったわけである。
 - 10) この「コクサイカ」の衝撃をある意味では正直に表明した保守主義的対応こそ長谷川三千子『からごころ 日本精神の逆説』、中央公論社、1986年、に他ならない。なお小島亮「挫折の思考—長谷川三千子『からごころ』小考」、『思想のマルチリンガリズム』、現代思想新社、2004年、を参照されたい。
 - 11) 筑紫哲也編『若者たちの神々』part 1-4、朝日新聞社、1984-5年、これは『朝日ジャーナル』に連載された評判のシリーズで、とりわけトップに浅田彰を据えたpart 1の圧倒的影響は特筆すべきである。
 - 12) 柄谷行人は80年代の「浅田彰現象」を鋭くも20年代の「福本イズム」に擬えている。柄谷編『近代日本の批評 I』、昭和編 上、56ページ、講談社芸文文庫、1997年。
 - 13) これを象徴する出版物は『講座マルクス主義研究入門』(1)~(4)、青木書店、1974年、である。全4巻からなるこの入門は芝田進牛編「哲学」(1)、田口富久治編「政治学」(2)、金子ハルオ編「経済学」(3)と並び永原慶二編(4)「歴史学」から成り立っている。(1)~(3)と根本的に相違するのは、それらの学問領域においてマルクス主義「正統派」はいわば「周縁のエピソード」であるのに対し、(4)の「歴史学」の場合は、70年代中期にあったなお制度的学問の中核の位置を占めていた点である。
 - 14) 一例を挙げればNPO-NGO系列の非政府セクター型グローバル市民社会論のヴァリエーションに評者は全共闘ラディカリズムから「市民社会論」版マルクス主義までの広義の「急進市民主義」的予定調和を感知する。
 - 15) 小島亮『ハンガリー事件と日本—1956年。思想史的考察—』、中央公論社、1987年(新版、現代思想

- 新社、2004年）、特に第1章「1956年の日本の思潮」を参照。
- 16) 浅田彰『構造と力』、勁草書房、1983年。浅田の著作ほど文章上の独創性に欠くが、しばらく後に出版された桜井哲夫『「近代」の意味—制度としての学校・工場』、NHK出版会、1984年、は同じく脱構築批評の「パクリ」ながら浅田をさらに重層的に注釈していて、いかに「浅田現象」がアカデミズムに及んだかの好個の例を示す。桜井は仲正の言う「現代思想」のほぼ全領域でアカデミックな二番煎じを演じ、「現代思想」の制度的暴力化に貢献した番頭に他ならない。
 - 17) 仲正にはこの論点を大きく扱った著作もある。『ポストモダンの左旋回』、情況出版、2002年（新版、世界書院、2004年）。なお仲正の『日本とドイツ二つの戦後思想』、光文社新書、2005年、とくに「ポストモダン状況」(184～238ページ)も参照。
 - 18) 1981年にリリースされたYMOのオリジナル・アルバムでこれは「80年代」初めに解散したYMOのレクイエム序曲とも聴くことができる。
 - 19) 言うまでもなくカール・マンハイムの保守主義の概念規定をここでは想定している。主論文は『保守主義的思考』(森博訳)、ちくま学芸文庫、1997年に収録されている。「実際に保守主義の意識の場合には、ミネルヴァの梟は、夕闇が立ち込めてきたときにしか飛び立たない」(『ユートピアの意識の形態変化と、近代の発展におけるその諸段階』、マンハイム『イデオロギーとユートピア』所収、高橋徹他訳、中央公論社、405ページ)。
 - 20) 原理主義と保守主義は混同されてはいけない。全く逆向きの思考であるからである。私権ではマンハイムの「逆向きのユートピア」は原理主義においてこそ当てはまり、保守主義にはまったく該当しない。この点の理論的混同がマンハイムにはあるため思想的マッピングは難渋な弁明になってしまった感がある。
 - 21) 野口悠紀雄『1940年体制—さらば戦時経済』、東洋経済新報社、1995年（新版、2002年）から小林英夫『帝国日本と総力戦体制—戦前戦後の連続とアジア』、有志舎、2004年に至る研究の基本線を評者は肯定的に継承する。日本の「戦後」保守体制は「冷戦」基地建設に向けた総力戦であると評者は仮説化しつつあり、大筋の展望は立命館大学文学部「日本史特殊講義」(2004年度後期)で述べた。なお丸川哲史『冷戦文化論—忘れられた曖昧な戦争の現在性』双風舎、2005年、は「戦時下文化」としての戦後日本を考察する序説である。
 - 22) 私事になるが80年代初期に京大法学部の勝田ゼミに教授の許可を得て評者は約2年間参加させていただいたことがある。勝田はロシア近代思想、アナキズムのほとんど独創的な開拓から出発し、70年代から時局評論に異端の保守主義論客として参戦して80年代まで駆け抜け孤軍奮闘の感があった。勝田の最もまとまった保守主義的自由主義論は、エドモンド・バーク、トクヴィルを論じた『現代社会と自由の運命』、木鐸社、1978年、である。大学紛争の渦中、勝田はアナキズムの地道な研究を続け、「知識人と自由」について語りながら三一書房の『アナキズム叢書』を編纂していた。その勝田の論壇への登場は『革新の幻想—社会主義を問い直す』、講談社、1973年、であり、「民主連合政府」の幻想がチラついていた時期に他ならない。それにしても勝田はなぜ「革新の幻想」批判の鋒先を戦後革新のチャンピオンたる「体制保守」=自民党主流派に向けなかったのか評者にとって大きな疑問であり続けている。学園紛争における叛乱学生のパブリズムや反体制革新の急成長に辟易し「小なる悪」として「体制保守」=「革新」を選択したのだろうか。
 - 23) 丸山は大衆社会論としてのシカゴ学派以降のアメリカ政治学を踏まえて『現代政治の思想と行動』(初版は上下、未来社、1956-7年)に収録された諸論文を執筆していて、近代化論でなく近代批判を内包しているというのが大雑把な評者の丸山政治評論理解である。この丸山に含まれる「大衆社会論」の部分は丸山学派の中では松下圭一によって固有の抽出をされることになったのである。
 - 24) フラットな「理念型としての近代」を日本において

追求した点では講座派の「近代主義」は明白で、労農派理論＝低段階資本主義説と雌雄を決するものの、講座派は今日から読み直すと、従属論の認識に近い論理を備えていて、惜しい線まで到着していたと再評価も可能である。なぜなら近代資本主義の展開が、国内の半封建的ウクライドを「槓杆」とするとの論は資本主義市場理論に根本的な訂正を迫るもので、辺境資本主義論の系譜、すなわちローザ・ルクセンブルクの資本蓄積論から従属論を経て世界システム論に至る流れに整合的であるからである。予言すれば、圧倒的な講座派批判の台風も過ぎ去った今、この文脈で再評価論は絶対に登場する。惜しむらくは、フラットな近代化論であったため、レーニンのプロレタリア独裁論からスターリニズムへと連結する近代開発独裁論の枠内で収まる議論に社会変動論レヴェルに落ち着いてしまった点である。

- 25) この論線に沿う松下の諸論文は『現代政治の条件』、中央公論社、1959年、と『シビル・ミニマムの思想』、東京大学出版会、1971年、に網羅されている。
- 26) 五十嵐富英『地方の時代へ 中央集権に抗して』、日経新書、1972年、は革新自治体と「保守」自治体の「体制内改革」を対照検討した先駆作で、革新自治体の政策が体制内改革のそれと根本的に対立しない姿を描いている。
- 27) 経済的近代化と社会的近代化は構造＝機能分析からすれば別概念であり、とりわけアジア社会において相違することは、富永健一『マックス・ウェーバーとアジアの近代化』、講談社学術文庫、1998年、を参照。
- 28) 小島亮編『大池文雄著作集—1953年～1961年—』、ペリかん社、1988年。
- 29) 高島善哉、水田洋、平田清明『社会思想史概論』、岩波書店、1962年、はすべての始まりであった。この象徴的な書物に丸山真男への寸評が入っていることや、当時のマルクス主義への批判が散りばめられていることは今日読み返して興味深い。著者たちは丸山の方法をやや曖昧なウェーバー主義

と理解し、さらに次のような決定的文章をつなげる。「一つの思想的立場が、状況の変化によって進歩的とか反動的ともなる…（中略）…わが国のマルクス主義者がときとして前向きの反動主義者となることがある…」(381ページ)。これは近代思想を全体として眺めてきた中で確認した肯定的遺産から見て主観的には「前向き」ながら結果的には「反動主義」以外の何者でもない日本マルクス主義の主潮流への柔和な異論に他ならない。この「反動主義」のバイパスした内容こそ「市民社会」として概念化されてゆくものであった。

- 30) 廣松渉『〈近代の超克〉論』、朝日出版社、1980年（講談社学術文庫、1989年）は、廣松の「近代批判」の論理を戦前版「ポストモダン」＝「近代の超克」にオーバーラップさせた著作で、1980年当時大きな反響を持った書物である。
- 31) 田口富久治『丸山真男とマルクスのはざままで』、日本経済評論社、2005年、に収録された丸山真男批判への逆批判は正当なものであり、ほとんどすべて首肯せざるを得ない。ただし丸山学派は、丸山の考えを一面化（八ヶ岳を富士山のように描く）して発展させたことも一方における事実で、丸山本人はこの過剰責任まで負わされているということなのだろうか。
- 32) 後に触れるアンチモダンの論脈で「土俗的革命思想」に祭り上げられる権藤成卿などは「反体制保守」の思想的典型と評者は考える。この点は評者は A modernség peremén, Kossuth Lajos Tudományegyetem Kiádja, 1987（『近代の境界にて』、コシュート・ラヨシュ大学出版会）で論じたが日本語では述べたことがないので、いずれ再論したいと考えている。
- 33) 言うまでもないが、ロストウの代表作は『経済成長の諸段階—一つの非共產党宣言』（木村健康、村上泰亮など訳）、東洋経済新報社、1961年、に他ならない。ロストウの教科書類は50年代にはすでに日本語訳が出ていたものの、この挑発的なサブタイトルと「日本近代」への言及こそ日本の反体制革新の機微に触れたわけである。ライシャワの『日

- 本近代の新しい見方』、講談社現代新書、1965年、の刊行時に至っては「ライシャワー路線」なる語すら生まれた。
- 34) 最も典型的なリアクションは金原左門『「日本近代化」論の歴史像』、中央大学出版会、1968年、に収められた諸論考であろう。
- 35) 竹内好「近代の超克」、この論文は数々のアンソロジーに再録されて古典となっているが、初出は『近代日本思想講座』、筑摩書房、1959年、である。なお同年、花田清輝『近代の超克』、未来社、も刊行されている。
- 36) 廣松渉の遺言の一つ「東北アジアが歴史の主役」に、『朝日新聞』1994年3月16日号夕刊、を今から再読すると、竹内の論理と廣松はどう違うのか評者にも識別は難しい。廣松の『近代の超克』の問題観は「あくまでも西洋近代の論理の内在的問い詰め」であり、この点で論理だけはそうなっているが地政的議論に論理領域を「パラダイム転換」してしまった戦前版から竹内に至る系譜をも「超克」とすると評者は了解したからである。公平に言うと竹内にあっては日本の戦争責任論と「近代の超克」は表裏一体となっていたから、戦前版のアジア主義再論には絶対に読めない。ただし面白いのは廣松本人の付けたと思しき「東北アジア」であろうか。この人口にあまり膾炙していない地理区分は欧米中心地理概念であって、「中近東」など同じ性格を持っている。廣松は戦略的に「アジア」とは書かなかったことで、旧版アジア主義と距離を保ったのかもしれない。
- 37) 市井三郎、布川清司『伝統的革新思想論』、平凡社、1972年、はその象徴的著作である。布川は色川大吉などの影響を受けた日本近世社会思想史研究者で、百姓一揆などの指導者のエスノメソドロジカルな分析＝民衆思想史研究を推進した。この課題の精神は安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』、青木書店、1974年、にも脈打っている。上山春平『日本の思想―土着と欧化の系譜』、サイマル出版会、1971年、はこの点でまことに興味深い位置を占め、60年代初期の講座派批判＝明治維新論と70年代からの「照葉樹林文化論」の中間にあり、アンチモダンとモダンの交錯を「日本的近代」として対象化する作業だった。
- 38) 『共同研究 転向』、中央公論社、1959-62年、や庶民生活史的な発掘は『思想の科学』にはかなり初期からあった傾向であるから、アンチモダンの媒体の一つが思想の科学グループであったと評したほうが正しいだろうか。仲正の「吉本の立ち位置」の評価は、鶴見俊輔に対してより正鶴を射た議論のように評者には見える。
- 39) 基本的に混乱あるのみの北沢方邦『構造主義』、講談社現代新書、1968年、という「歴史的迷作」はどうやら「反近代主義」として構造主義を読もうと必死になった末の混迷を書きなぐった精神の記録となった。
- 40) 平野謙のいわゆる「小林多喜二と火野葦平を表裏一体として見る」視点は、文学テキストから「物語」を差し引いた時に現れる「実生活」の地平においての「等価」を認識するものである。構造主義ではないが構造主義的ではあり得る平野の論点は、吉本の大きな知的源泉になったと考えられ、構造主義に順接したのではないだろうか。近似の表現を、固有名詞を変えながら（機動戦士ガンダム、壺谷雄高、フーコー、など）吉本は愛用した。
- 41) 磯田光一『吉本隆明論』、審美社、1971年。
- 42) 戦後思想上、この点で特筆大書しなければならないのは、1969年、大学紛争で深く職を辞し批評活動を展開した磯田光一である。小沢書店の倒産によって『磯田光一著作集』が中座したことは何を置いても残念でならない。磯田は吉本のような異形でなくあくまでも正統的なダンディズムでもって吉本的位置を本当は吉本以上に確保していた重要人物と言ってよい。磯田の論点は、「近代主義に徹したが故に構造主義的である」わけで、柄谷行人、蓮見重彦の露払いを行っていた。戦後文学をあくまでも内面的に解体を目指した磯田は、前田愛のようにポストモダンの概念を使わず、注意深く戦後文学のターミノロジーに固執し続けたが、戦後批評家論、転向論、ロマン主義文学論、都市

- 論のすべてにわたる文化領域で記号論的＝言語論的転回を実質的に行っていた独創的思索者であった。ポストモダンの台頭する中、1987年、磯田は生前に決して存在を他言しなかった妻に見送られた伝説的な死に方をして論壇から去った。
- 43) 北沢方邦の『脱近代へ 知/社会/文明』、藤原書店、2003年、に至る70-90年代知的営みはまったくその典型である。
- 44) 今日から考えれば、60年代末の反近代主義者によるローザ・ルクセンブルク再発見もかなり惜しい地点まで来ていたと考えられる。近代的資本主義的發展が絶えず非近代的な生産様式を再生産する（ここまでは講座派と論を共有可能）ならトータルに再生産（質上げ闘争などの）「外部」から近代資本主義を瓦解させなければならないとする認識は、資本主義システムからの戦略的離脱を通じた「自立」を模索した従属論の「帝国主義本国」ヴァージョンである。
- 45) この傾向をポジティブに受け取った場合、60年代中期からの経営学ブームから未来学に至る流れを生むことになる。香山健一『未来学入門』、潮新書、1967年、などを読み返せば、展望される「未来史」なるものは今日のメガ・トレンド分析とさほど変わらない内容で、特に違和感を覚えない。ただし、現前する社会と文化への根源的な否定精神に貫かれたモダニズムと打って変わった脳天気な現状謳歌は、70年万博にイデオロギー的に集約されていって芸術分野では、岡本太郎、真鍋博、建築では黒川紀正、社会評論では近代化論から転じた坂本二郎などによって表現される。未来学の終焉は、象徴的にもネガティブな未来予測を行ったローマ・クラブの『成長の限界』（邦訳は大来佐武郎訳）、東洋経済新報社、1972年、によって齎された。何とか命脈を保った日本の近代化論は、70年代に、全く持って時代錯誤にも「成長」神話をもってこれに対抗、しばらく後のオイル・ショックを契機に高度経済成長政策をいち早く転換させ「戦後革新」路線を修正した体制保守勢力と根本的な対立を見ることになる。「反体制革新＝体制保守」の独ソ同盟の崩壊はここに標され、70年代末期の大平内閣を契機に大きく政治的・社会的関係場を変えるに至るだろう。
- 46) 清水幾太郎『現代思想』上、岩波書店、1966年、は「反体制革新・近代化論」を超克し「近代化論」という近代主義に改めて降り立ったモダニスト清水の自己確認の書で、まったく象徴的にも20世紀初期の抽象絵画から叙述は起こされている。これは実は清水の同時代論＝60年代論の投影であり、孤高のモダニストは、まずもって「近代化の解体」から追認し、近代を擁護するために闘い、結局近代固有の問題を解決する方途を近代の領域内で求めてリヴァイアサンを蘇らせる。これが60年代後半に沈黙もせず、70年代に切腹しなかった人物の辿り着いてしまった80年代の醜態ではあった。
- 47) ポストモダンの台頭時、流行語となったのは「パラダイムの転換」であった。実はこの概念を一気に有名にした著作は70年代初頭にすでに翻訳が出ていたのであった。〔クーン（中山茂訳）『科学革命の構造』、みすず書房、1971年〕パラダイム論の眼目はパラダイム（通常科学を成立させる知的に共有すべきもの）の不連続の指摘にこそあり、「パラダイム」は「進展」するのではなく不連続に「転換」するとの考えにあった。この論理でクーンが迎えられなかった知的環境こそ60年代末～70年代初であった。
- 48) ポストモダニストと吉本の対談（鼎談その他も含め）で最も興味深いのは坂本龍一とのそれ『音楽機械論』、トレヴィル（リプロボート）、1986年、に他ならない。吉本の原質を坂本が脚色する作曲（添付ソノシート）は吉本批評のエクリチュールそのものの場所を換喩する。
- 49) 中沢新一『僕の叔父さん網野善彦』、集英社新書、2004年。
- 50) 小島亮「網野善彦的トポフィリア」、『東北学』新1号、柏書房、2004年、を参照。
- 51) これには異論も多いかもしれない。戦後歴史学は、1970年代に第2次『岩波講座 日本歴史』全26巻、岩波書店、1975-7年、を刊行してアンチモダン史

学の成果を積極的に盛り込み、とりわけ地域史研究への積極的な取り組みには大きな努力をしたからである。だが、芳賀登『地方史の思想』、NHKブックス、1972年、以来の批判が一貫して繰り返されてきたように、制度的歴史学の社会構成史的体系そのものにアンチモダン史学は異を唱えたとともに、大学などの制度内に人材を求めにくい状況—信濃史学会を率いた一志茂樹のように大学アカデミズムに敢然と挑戦し続けた気骨ある地方史研究者も多くいた—そのものは「カルスタ」系歴史家の台頭する90年代まで変わらなかったのであった。

- 52) 色川大吉『明治の文化』、岩波書店、1970年、色川の「制度内」業績の最後をなすものである。これ以降、彼はアカデミズムと決別し、民衆史運動の中に積極的に入ってゆくジャーナリズムを活躍の舞台とする。
- 53) この中で鹿野正直の位置はある意味では微妙である。『資本主義形成期の秩序意識』、筑摩書房、1969年や『日本近代化の思想』、研究社、1972年、に現れた鹿野の歴史学は、時期的に色川などと一緒にされてきたが、色川のようなアンチモダンな性格は全くない。むしろ体制的近代の「歪さ」に対していかに「民衆の近代が普遍的価値を有しているか」を論証する代替近代主義的な視点に貫かれ、この点こそ講座派系列の制度的歴史学と統一戦線を組ませた要件となったのである。
- 54) 70年代には日本を代表する歴史学会である歴史学研究会、歴史科学協議会、日本史研究会の3学会は正統派マルクス主義またはそれと対立しない立場のセクトと事実上はなっていた。もともと戦前以来の実証主義的史学への抵抗の拠点たる民間学会（ただし大学知識人がほとんどで、実証主義歴史学は特筆すべき全国学会を有していなかったため実際にはアカデミズムの拠点であった）であったが、これらから非正統派マルクス主義者は一斉に退去をしたのである。歴史科学協議会は前身が民科歴史部会であり、「アメリカ帝国主義からの独立」を綱領的文書「歴史科学協議会創立宣言」（1967年）に盛り込んでいて、従って講座派マルクス主義

者でない限り加盟してはいけない論理になっていた。

- 55) 部落史研究の分裂、文化史・芸能史研究者の歴史学からの離脱（この両者はとりわけ前近代史では課題的に重なる部分もあった）という痛ましい出来事は、主たる舞台が関西であったため東京の大学研究者による研究史ではあまり論じられることはない。この事態の前後を知るには『講座日本文化史』全8巻、三一書房、1961-3年、を紐解けば即諾し得る。70年代以降、文化史は大きく日本文化論に旋回し歴史学とは絶縁を始めるのであった。いわゆる立命館史学の崩壊こそこの事態の最大の象徴であったが、大学紛争の収拾をめぐる政治的立場の分裂も直接の影響があった。一つの証言として岩井忠熊『戦争をはさんだ年輪—歴史研究者のあゆみ』を挙げておく。著者はこの渦中に立命館大学文学部日本史学科教授を勤めた。
- 56) 小論では触れないが、70年代末期に網野史学とはまったく逆な反歴史主義史学とも言うべき政治史研究の流れ（伊藤隆から御厨貴に至る）も離陸する。伊藤隆の『大正期「革新派」の成立』、塙書房、1978年、はある意味では構造主義的な視点でもってイデオロギーの部分を「ゼロ」にした評価軸を生み出そうとした試論であり、伊藤がまず何を解体しなければならなかったのが明確に理解できる。
- 57) 全く興味深いことに、この過程はかつての昭和史論争と60年代における司馬遼太郎の民間史学の興隆と同じパターンを見る。小島亮、注42論文を参照。
- 58) 60年代にアレクサンダー・ガーシェンクロン旋風の吹き荒れた旧東欧では、近代化論にも落ち着いた対応をできたばかりか、社会史ブームは限定的に留まった。
- 59) 小論の注18を参照。これに比べたなら泉靖一編『構造主義の世界』、大光社、1969年、はまだしも文化人類学的ローカル・ナレッジの範囲の中できちんと構造主義をフォローできている。世界観としてよりも研究方法論に限定しては一部で構造主義は

- 受容可能ではあった。
- 60) 大内裕和、酒井隆史、三宅芳夫、山根伸洋、柿原泰、藤本一勇のディスカッション「80年代とは何だったのか」、『現代思想』2001年11月号、62-95ページの認識も評者に近く、大平内閣の政策研究会の意義についても詳しく述べられている。ポストモダンとネオ保守主義の共存または共鳴、脱構築批評の限界についての指摘も鋭く、三宅芳夫の立場に評者は共感を寄せる。
- 61) このうちもっとも有名なプロジェクトは村上泰亮、公文俊平、佐藤誠三郎『文明としてのイエ社会』、中央公論社、1979年、として公刊されたものであった。これは今日読み返せば、「講座派」歴史学へのネガ総集編であり、時系列評価を共時的評価に代え、すべてをポジティブに把握した上で、日本モデルを文明的に構想する。「日本的経営論」などをサポートする議論として大きな影響を与えた。
- 62) 大平の近くにいた長谷祐一郎に『近代を超えて 故大平総理の遺されたもの』1・2、大蔵財務協会、1983年、という著作がある。
- 63) 竹村健一、谷沢永一、渡部昇一と深田裕介を指す。この他に重要な論者は竹内宏、長谷川慶太郎を加える。彼らと飯田経夫などは発展途上国論などにおいて盛んに80年代に「日本モデル」の称揚を行ったものであった。ただし日本モデルの開発独裁型発展論を一般理論化した場合、アジア新興社会の史的意義は鋭く把握できたわけで、講座派と大河内理論の折衷の如き隅谷三喜男『韓国の経済』、岩波新書、1976年、の崩壊論に対し長谷川慶太郎『韓国の経済』、研究社、1978年、と渡辺利夫『アジア中進国の挑戦』、日経新書、1979年、の方が80年代以降を確実に予言できた。
- 64) 松井剛「消費論ブーム マーケティングにおけるポストモダン」、『現代思想』2001年11月号、120-9ページ。
- 65) 小島亮「探偵の帰国 日本と近代知(金田一)について」、『思想のマルチリンガリズム』所収、現代思想新社、2004年、はそうした感慨を率直に記した試論である。
- 66) 中川八洋『福田和也と《魔》の思想 日本呪詛のテロル文藝』、清流出版、2005年、に収録された福田論は「ポストモダン」な「アナキスト」として福田を論難する書である。
- 67) 蛇足を恐れずに注記すると、この歴史学的「カルスタ」のネタは全部60年代末からのアンチモダンの系列から生まれたテーマから取られ、知的に新しく対象化された領域があるかどうかは大きな疑問である。この事情は本文中にも書いた通りである。その多くは、注23の芳賀登の著作の巻末「参考文献(改題付)」(273-281ページ)と第2次『岩波講座日本歴史』を瞥見すれば理解できる。『日本民衆の歴史』全11巻、三省堂、1974-6年、は制度的歴史学の立場(社会構成史)から「民衆史」の業績を再把握しようとして(これは方法的に人民闘争史研究と当時言われた)中途半端に暗礁に織り上げた通史である。同シリーズには全国を網羅する「地域版」も構想されたが部分的にしか刊行されなかった。網野善彦自身は、60年代地方史研究などへの深いオマージュを捧げ、真の開拓者への礼儀を忘れたことはなかった。
- なお、色川大吉、芳賀登、齋藤博『鼎談 民衆史の発掘—戦後史学史と自分史を通して—』、つくばね舎、2006年、は、20年以上も前に地方史研究誌に掲載されたものの再版であるが、「民衆史」の位置づけおよび具体的な展開を知る上で第一の証言となっている。ここで齋藤は「民衆史的視座の確立」期を「1963-74年」と押さえているのも広義には妥当な時期区分と言える。